



取材・文 後藤 真(フリーライター)

ちょっと**拝見** 学校訪問

神奈川県立 相模向陽館高等学校

神奈川県初の昼間定時制普通科高校

—自己肯定感を育み、他者を尊重し、良好な関係を築く生徒を育てる—

神奈川県中央部、座間市に位置する相模向陽館高校は、同県立学校初の昼間から学べる単位制の定時制高校として今年4月に新たに誕生した学校だ。「向陽館」という校名の由来は、明るく前向きな姿勢で学ぶイメージ、また所在地座間市の市花「ひまわり」のイメージも込められている。

県立高校改革推進計画を進める中で、不登校を経験した生徒や日本語の学習支援等が必要な外国につながるのある生徒など、半日単位の昼間の時間帯で学びたいといった生徒のニーズに応えるため、相模向陽館高校は、午前部または午後部に所属し、4年間学んで卒業できる修学の仕組みを基本とする、多部制定時制高校として開校した。

こういった経緯もあり、同校の使命は明確だ。「基礎からじっくり学びたい」「自分のペースで学びたい」といった、中学校までの学校生活にあまりなじむことができなかった不登校や引きこもり経験

のある子ども、あるいは「働きながら学びたい」という子ども、外国につながるのある子どもたちが、豊かな心を育み、確かな学力を身につけられるような教育の充実を目指す。そして、そうした生徒たちが最終的に4年間の高校生活を経て、自己肯定感に裏打ちされた「生きる力」を身につけて、社会に巣立っていくことをビジョンとして掲げている。

こうした理念を掲げた同校は社会の注目を集め、昨行われた学校説明会も回を重ねるごとに出席者が増え、毎回400人を超えるほどの盛況ぶりを見せた。同時に開催された相談会への参加者も多く、特に保護者の参加が目立ったという。結果的に午前部前期選抜では、倍率5・12倍を記録した。

現在、午前部・午後部合わせて298名が1期生として在籍しているが、こうしたタイプの公立高校へのニーズは高く、まさに県内各地から生徒が集まってきている。なかには片道90分以上かけて

通う生徒もいる。中学校新卒の生徒が中心だが、定時制高校らしく生徒の年齢層は幅広く20代、40代の方も在籍する。

「選択理論^(注1)」という心理学をベースに、生徒の自己肯定感の回復や温かい人間関係に満ちた「クオリティ・スクール^(注2)」を目指す、伊藤昭彦校長と小島淳子副校長にお話を伺った。

豊かな学校生活を 送るための時間割

教育課程をみると、1・2年次にはほとんど選択科目はなく必修科目を各21単位ずつ取るようになっていく。選択科目の履修は主に3年次からとなる。授業展開は45分の授業が1日4時間で、習熟度別・少人数学習、個別指導を基本に様々な工夫がなされる。そのう

ちのいくつか特筆すべきものを紹介する。

○「ステップ1・2」…1年次で各1単位ずつ週2時間ほどある。必修科目であり、基礎的な学力としての「読み・書き・計算」の力の定着を目指し、苦手意識の克服、中学の勉強の復習を行う。

○「総合的な学習の時間」…社会人として生きるために必要なスキルを身につけることを目指す。具体的には世界保健機構(WHO)が定義づけた10のスキル(「自己認識」「共感性」「意思決定」「問題解決」など)を柱に授業を進めている。

○「トライアルタイム」…午前部と午後部の生徒が交流できるように、午前部の放

【資料 日課表】

午前部	
1校時	8:40~9:25
10分休み	
2校時	9:35~10:20
S H R	10:20~10:35
3校時	10:35~11:20
10分休み	
4校時	11:30~12:15
清掃	12:15~12:30
トライアルタイム 12:15~14:00	
午後部	
1校時	14:10~14:55
10分休み	
2校時	15:05~15:50
S H R	15:50~16:05
3校時	16:05~16:50
10分休み	
4校時	17:00~17:45
清掃	17:45~18:00

課後と午後部の始業前にそれぞれ設定されている。週1日のLHR以外には自由に使い、友達のおしゃべりや自習、あるいは分からない内容を各教科の先生に聞きに行くこともできる。

また「トライアルタイム」は、部活・サークル活動の時間としても利用でき、部活・サークル活動への関心も高



「こまわり祭」で演奏を披露する生徒たち

く、既にいくつかの部・サークルがスタートしている。そして、例えば軽音楽部は既に7月のミニ文化祭「こまわり祭」で小さなステージながら演奏を披露するなど頑張っているという。

さらに、ボランティア活動の時間としても利用可能だ。生徒の中にはボランティア活動への意識も強く、実際に自主的に地域のゴミ拾いを行っている生徒もいるという。ただ、やがてはまとまった活動ができるように福祉施設などと連携して、単位認定の段階まで持っていきたいという考えも学校としてあるという。

伊藤校長は、この時間を使って併設された座間養護学校分教室の生徒たちとの「コラボ」も考えているという。例えば、一緒に様々な野菜を育て収穫するなど畑仕事等をできればということだ。

人間関係の回復を 応援する指導

学校として掲げるミッション達成のため

め的手段として、生徒との関わり全体に選択理論心理学に基づくカウンセリングの手法が取り入れられているのが同校の最大の特徴と言える。具体的に以下のようなアプローチが想定される。

中学までの学校生活で何らかのつまづきを経験した生徒は、「批判される」「罰せられる」「がみがみ言われる」といった対応によって「いじける」「消極的」「反抗的」「攻撃的」といった態度をとることになり、それが繰り返され、やがて「自己否定感」の負のスパイラルに陥ってしまったものと考えられる。

そこで、この学校では逆に「受容する」「信頼する」「励ます」「意見の違いについて話し合う」といった対応により、負のスパイラルを「自己肯定感」の正のスパイラルに変えていくことが目指されるのだ。例えば、喫煙している生徒がいても、頭ごなしに叱責することは極力避け、まず話をじっくり聞き、その上であくまで本人の思考と行為の変化、よかれと思う